
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 130

July 2023

2023 年度大会(10 月 28 日～29 日)

プログラム決定

九州大学にてハイブリッド開催予定



(会場となる九州大学伊都キャンパスのセンターゾーン入口)

【2023 年度ロシア史研究会大会について】

すでにお知らせしたとおり、ロシア史研究会 2023 年度大会は 10 月 28～29 日に九州大学伊都キャンパスで、ハイブリッド形式で開催される予定です。会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。

昨年同様、全プログラムについてオンライン参加が可能ですが、今年は諸事情により昨年よりも簡略化した形にさせていただきます。また、状況によっては全面オンライン開催に変更する可能性があります。事務局からの連絡にご注意ください。

対面での懇親会を手配しており、今年は4年ぶりに対面の懇親会を開催できるのではないかと期待しておりますが、新型コロナウイルスの感染状況がひどい場合には、懇親会を取りやめとすることも考えられます。

大会プログラムの概要は以下をご覧ください。報告要旨は次号(大会特集号)に掲載予定です。

大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局 (mhamamoto/あつと/omu.ac.jp [/あつと/を@に変換してください]) 濱本宛にお送りください。

<大会時の託児補助>

今年度は、「任意の託児所利用に対する補助」(自宅でのシッター利用等に対して、1日につきお子様1人あたり5000円を支給)を実施いたします。8月下旬にMLにおいて告知し、その後に申請を受け付けます。ご質問がありましたら、事務局までお気軽にお寄せください。

【大会プログラム(仮)】

10月28日(土)		
	A会場(イースト2号館 E-109)	B会場(イースト2号館 E-110)
11:00-11:55	ベクトウルスノフ ミルラン(北海道大学) 「ブカラ部族の台頭?1920年代後半のクルグズスタンにおける村ソヴィエト選挙の考察」 討論者:奥田央(東京大学名誉教授) 司会:鶴見太郎(東京大学)	夏陽開(東京大学・院) 「「探検」に見たシベリアへの地域認識の形成:福島安正のシベリア横断を手がかりとして」 討論者:兎内勇津流(北海道大学) 司会:シュラトフ ヤロスラブ(早稲田大学)
11:55-13:30	昼休み (12:00~13:00 委員会) (イースト2号館 E-101)	
13:30-16:00	共通論題A(イースト2号館 D-105) ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交 黛秋津(東京大学)「ロシア・オスマン戦争におけるロシア帝国の対西欧外交:19世紀を中心に」(仮) 石野裕子(国士舘大学)「フィンランドにおける冬戦争の位置付け:継続戦争との比較を中心に」 麻田雅文(岩手大学)「ロシアの戦争の文化としての囚人兵:20世紀を中心に」 討論者:池本今日子(大東文化大学)、花田智之(防衛研究所) 司会:宇山智彦(北海道大学)	
16:15-17:45	総会	
18:00-	懇親会	

10月29日(日)		
	A会場(イースト2号館 E-109)	B会場(イースト2号館 E-110)
9:30-10:25	林健太(北海道大学・院) 「ピョートル1世時代の出版業におけるロシア正教と国家:フェオファン・プロコポーヴィチの人脈に着目して」 討論者:豊川浩一(明治大学) 司会:田中良英(宮城教育大学)	三栖大明(北海道大学・院) 「『自然』誌論争に見るブレジネフ期ソ連におけるエトノス理解の焦点」 討論者:渡邊日日(東京大学) 司会:立石洋子(同志社大学)
	10:30-12:30 パネル「近代ロシアはいつどのように形成されたのか?—揺れ動く近世ロシアの国家・社会・文化」 田中良英(宮城教育大学)「北方戦争再考—戦争を巡る国内外の反応」(仮) 池本今日子(大東文化大学)「エリザヴェータ帝と正教会—初期の政策と聖職者」(仮) 鳥山祐介(東京大学)「エカテリーナ二世期の言語文化におけるロシア」(仮) 討論者:宮野裕(岐阜聖徳学園大学) 吉田浩(岡山大学) 司会:豊川浩一(明治大学)	10:30-11:25 李暢(北海道大学・院) 「1920年代ハルビンにおける日露中市民の多文化共生:『濱江時報』を事例に」 討論者:伊賀上菜穂(中央大学) 司会:神長英輔(國學院大學) 11:30-12:25 井上岳彦(人間文化研究機構/北海道大学) 「ハンボラマ・イロルトウエフと外務省:アジア巡礼旅行(1900年—1901年)をめぐって」 討論者:左近幸村(九州大学) 司会:藤澤潤(神戸大学)
12:30-13:30	昼休み	
13:30-16:00	共通論題B(イースト2号館 D-105) 「亡命」再考 浜由樹子(静岡県立大学)「ユーラシア主義における「ウクライナ問題」——思想の循環史の観点から」(仮) 高橋沙奈美(九州大学)「ウクライナの「外」のウクライナ—亡命教会と在外教会」(仮) 齋藤宏文(九州工業大学)「ソ連遺伝学における知の漂流と継承—N・V・チモフェーエフ=レソーフスキーとT・ドブジャンスキーの事例から—」(仮) 討論者:中嶋毅(東京都立大学) 司会:半谷史郎(愛知県立大学)	

【国際セミナーレポート】

「ロシア・ウクライナ戦争：歴史の回帰 The Russo-Ukrainian War: The Return of History」

2023年6月10日土曜(14~17時)に、東京大学本郷キャンパス国際学術総合研究棟1階文学部三番大教室にて、表題の国際セミナーが開かれた。講演者はセルヒー・プロヒー氏(ハーバード大学ウクライナ研究所)とオレーシャ・フロメイチュク氏(ロンドン・ウクライナ研究所)である。両氏は、デイビッド・ウルフ氏の尽力により、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのForeign Visitors Fellowship Programおよび国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築の枠組みで日本に招聘された。東京大学の講演会は主に国内の人文社会系の研究者のために企画されたものであり、共催者としてウクライナ研究会、東欧史研究会、ロシア史研究会、東京大学文学部西洋史学研究室が名を連ねた。特に東京大学の池田嘉郎氏には会場の準備から司会まで多大なご協力を頂いた。当日の会場には英語で開催される講演会としては異例とも言える70名近くの聴衆が集まり、ウクライナ問題への関心の高さがうかがえた。

両者の講演は、侵略を受け、領土を暴力的に削られ、領域内において戦争が継続させられている国家の側からの見解である。セルヒー・プロヒー氏は、ニジニ・ノヴゴロドで生まれ、ザポリージャで育ち、モスクワ、キーウで学位を取得し、ドニプロ大学やカナダのアルバータ大学で教育・研究に携わったのち、ハーバード大学に移り、2013年からはハーバード大学ウクライナ研究所の所長を務めている。歴史学者としての最初の専門的な書籍は近世ウクライナのコサックと宗教についてであるが、そののち、ウクライナとロシアの歴史のみならず、チェルノブイリ原発事故や原子力、さらに現在のウクライナ戦争など、数多くの現代の諸問題についてもモノグラフを著している。

プロヒー氏は、現在のウクライナでの戦争(プロヒー氏によれば2014年から始まっていた戦争である)を「帝国崩壊の物語」と表現する。ソ連における第二の共和国であるウクライナなくしては、ソ連を維持・再興することは不可能である。しかし、ソ連崩壊後にウクライナが民主的発展の道を進んだのに対して、ロシアは短期間で権威主義へと変貌した。この時、ウクライナにとって重要だったのは、EUへの道筋というよりは法の支配そのものであったが、ロシアがユーラシア経済連合とEUの間の二者択一を迫ったために、両者の間のゼロサムゲームとなり、「民主主義」が地政学的な質を帯びることになった。プーチンは常にポスト・ソヴィエト空間の統合を目指しており、そのためには分離しつつあるウクライナを留めねばならず、東スラヴ三民族一体論をもちだして侵略を始めた。この戦争は今でも変化し続けており、南の境界がどこになるのかはまだ明らかではないが、それは戦場が決めることになる。はっきりとわかっていることもある。ウクライナが今後も独立した国家であること、ヨーロッパに属することになること、東スラヴ三民族一体論は消失すること、そして、ヨーロッパとロシアの間のグレーゾーン(ウクライナがこのグレーゾーンであった)がなくなり、分断線は今よりもはるかに明確になる、ということである。こうして、ウクライナとロシアの間に存在していた曖昧さはなくなり、将来的にはドイツとフランスのような関係になるだろう、と語った。

もう一人の話者、オレーシャ・フロメイチュク氏は、リヴィウに生まれ、UCLで歴史学の博士号を取得し、ケンブリッジ大学、イーストアングリア大学、キングス・カレッジで東中

欧史を教えた後、現在は独立機関であるロンドン・ウクライナ研究所の所長を務めている。彼女は、SS 師団「ガリーツェン」に関する戦後の言説分析のモノグラフ、さらに2017年に東部ウクライナの最前線で戦死した長兄についてのエッセイの著者である。

彼女が繰り返し強調するのは、今までウクライナが国ではなく単なる領域にすぎず、自己意識、独自の文化・伝統・歴史をもたない国とみなされてきたことが侵攻の原因になっているということである。人々はモスクワのレンズからこの地域を見るのに慣れてきたために、ウクライナがロシアの影響圏にあるとみなすことに抵抗がなかったというのである。長くウクライナの声は聞く耳をもたれず、望まぬバッファ・ゾーンの役割を果たさせられてきた。こうした状況に対抗するため、フロメイチュク氏はウクライナの人々の抵抗の歴史に光を当てる。その際、反ソ連であっても、親ウクライナであるとは限らないということにも言及する。例えば、ヨシフ・ブロツキーのウクライナへの呪詛に満ちた詩には、ウクライナ人が死の間際にシェフチェンコではなくプーシキンの詩を口ずさむことになるだろうと謳われていた。しかし、2022年9月にハルキウのバラクリヤ市がウクライナ軍によって解放されたとき、ロシア国旗とロシア・ウクライナの一体が謳われた看板を取り外すと、その下には占領前に描かれたシェフチェンコの肖像画と詩があった。彼女はある種アーティスティックな手法で(彼女の活動は文化・芸術分野に広がっている)、こうしたウクライナ民族の自意識とプロテストの歴史を振り返る。そして、占領者とともにプーシキンの詩がウクライナの町に到来したことで、プーシキンが侵攻と破壊の象徴になったことも付け加え、ロシア文化が帯びることになった政治的意味をシンボリックに語った。

質疑では、ドンバス戦争、ドイツとの関連、歴史の回帰の他地域への波及、中国ファクター、ウクライナ研究の必要性と魅力、ウクライナの歴史観、ホロドモールの見方、停戦の見通し、東西の文化的差異などの多数の質問が出された。質問からは、ウクライナが文化・政治的に分断された弱い国家であり、統一的な利害意識がないというイメージが私たちの間に強固に沁みついていると感じることもあった。これに対して、プロヒー氏は、「自分は東部出身で彼女は西部出身だけど、つかみ合いの喧嘩になったりはしないよ」と冗談を述べた後、2014年以前の大統領選から見れば分断国家であったものの、その後ウクライナ人の中には深い変化が生じたと論じた。フロメイチュク氏は、文化的ダイバーシティを内包するシヴィック・ネイションへの見通しを語り、いつか戦争が終わったとき、ウクライナに政治的ダイバーシティが実現することも期待すると付け加えた。

プーチン政権は、千年の歴史に培われた国家として、ロシアはソ連の継承国であると憲法に書き込み、さらにウクライナ人とロシア人は一体であると宣言して、侵攻を始めた。一年半に続く戦争の暴力性は境界を挟んで非対称であり、その非対称性は戦争が長引くほどに構造化されている。侵略に際して歴史の解釈が「武器化」されたため、欧米の学界・教育界では「脱植民地化」(帝國的な国家からの従属的領域・住民の分離、ロシア中心主義の克服)がスローガンとなっているが、ロシアは現在、こうしたウクライナや欧米の試みに対抗する歴史言説を構築し、教育を通じて制度化しようとしている。このように、歴史のナラティヴは戦争の最前線の役割を果たさせられており、ロシア史に関わる、どの時代のどのような状況の説明であっても中立であることはますます難しくなっているように感じられる。

私たちが純粹に学術的だと考えてきたことのうち、どの部分がどの程度、ロシアやソ

連の中心からの眼差しに沿ったものだったのだろうか。近年、帝国研究は民族的多様性を焦点化してきたが、実際に諸民族の主体性にどれだけ関心を払おうとしてきたのだろうか。ウクライナの自律性や分離を強調する論者を過激な民族主義者のように捉えて、真面目に耳を傾けないということはなかっただろうか。その傾向は、国民国家史観が廃れた方法論であるという見方や、ロシア研究が欧米中心主義的な価値へのカウンターパートを強調しようとしたことによっても助長されはしなかっただろうか。今回の講演会は、戦争が始まるまでは真剣に受けとめられなかった人々の声であるように感じられた。こうした見解に対していかなる立場をとるにせよ、「ロシアの侵攻は許されない」という枕詞を付けさえすれば、後は冷静な学術的議論ができるという保証があるかどうか、すでに心もとない。コンテキスト自体が変化してしまい、いかなる言説も、知らず政治性を帯びることになった。少なくともこのコンテキストの変化を強く意識する必要があるように思う。もっとも意識しなくてはならないのは、ロシア史研究者であろう。(文責：青島)



【新会員の紹介】

2023年1月～6月の新入会員(1名)をお知らせします。

三栖 大明(2023年5月8日入会)

所属:北海道大学大学院文学院博士後期課程

専攻・テーマ:ソ連民族学におけるエトノス理論の展開

【献本について】

寄贈書籍(2点)をご紹介します。

亀田真澄『マス・エンパシーの文化史:アメリカとソ連がつくった共感の時代』東京大学出版会、2023年

高橋沙奈美『迷えるウクライナ 宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』扶桑社新書、2023年

ロシア史研ニューズレター
第130号 2023年7月18日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(長縄宣博・松本祐生子)
〒558-8585
大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪公立大学大学院文学研究科濱本研究室気付
